

に至りしものなりとす、然れども此の計畫は遂に實現を見るに至らずして止みしが如く、此の年秋に於て、何等之に關する記事の存するもの無し。

唐が此の如く對回鶻策を講ずる間に、烏介可汗及び其の下に在りたる部衆が如何なる行動を執りしものなるかに就きては殆んど何等の消息を求むるを得ず、思ふに黑車子室韋の間^(三四)に在りて、纔に敗殘の餘勢を保ちたるに過ぎざるべきが、通鑑は會昌四年九月の條に至りて始めて之に關する記事を載せたり、即ち

李德裕奏、據幽州奏事官言、訶知回鶻上下離心、可汗欲之安西、其部落言、親戚皆在唐、不如歸唐、又與室韋、已相失計、其不日來降、或自相殘滅、望遣識事中使、賜仲武詔、諭以鎮魏已平昭義、惟回鶻未滅、仲武猶帶北面招討使、宜早思立功

と記せり、此の如く唐と黠戛斯とが相應じて回鶻を伐たんとしたる會昌四年九月頃には、回鶻にては上下人心相和せず、前年以來寄托したる黑車子室韋部をも去りて他に逃避するか、若しくは其の地に在りて自滅を待つべき有様なりしが、可汗が安西に移らんとする企望は、必ずしも此の時初めて生じたるものには非りしが如く、冊府元龜通好篇に前記の如く會昌三年九月黠戛斯に與へたるものとして載する詔書中には、「比聞廻紇深意、嘗欲投竄安西云云」と見ゆ、此の詔書は實は四年二月に與へられたるものなるべきこと前述の如くなれば、此の年九月以前既に烏介可汗は此の計畫を有したるものと見ざる可らず、然も李德裕の奏によりて推し得るが如く、其の部下中には、却りて唐に降らんことを主張するものありしかば、可汗の志は實現を見るに至らずして當時に及び、而して其の勢は益々衰運に陥れるに過ぎざりしが如し、舊書廻紇傳には烏介可汗が和解室韋(實は黑車子室韋)に走りし後の有様を記して